

- 日 時：2020年4月12日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：「わたしは、主を見ました。」
- 説教者：飯島 信 牧師
- 聖 書：旧約 イザヤ書 55：1-11（旧 p1152）  
新約 ヨハネによる福音書 20：1-18（新 p209）
- 讃美歌：21-325「キリスト・イエスは」21-226「輝く日を仰ぐとき」

お早うございます。

4月12日、主イエス・キリストが甦えられたイースターの朝です。

イエス様は、木曜の夜、12弟子と最後の晚餐を終え、ゲッセマネの園に向かわれました。神様に祈るためです。12弟子との最後の食事ですが、その場には自分を銀貨30枚で祭司長たちに売り渡したイスカリオテのユダも一緒でした。そして又、イエス様は、食事の後、自分の身に何が起きるかもご存知でした。捕らえられ、裁判にかけられ、ゴルゴタの丘で十字架に架けられることをです。

私は、思わずにはいません。

最後の晚餐に臨んだイエス様は、どのような思いで弟子たちと食事をしたのだろうか。

この後、自分に待ち受けている出来事に思いを馳せた時、耐え難い恐れと、3年にわたって寝食を共にした愛する弟子たちとの別れの哀しみの中で、身も心も張り裂けるような思いでいたのだと思うのです。十字架への恐怖と愛する者との別離の哀しみ……。押しつぶされるようなそれらの想いの中で、イエス様は祈りの山に向かいます。オリーブ山の中腹に位置するゲッセマネの園で神様に祈るためです。

私たちは、ここでのイエス様の祈りを知っています。

マタイ、マルコ、ルカの福音書の記者が記しているからです。

「父よ、この苦き杯を私から取り除けて下さい。」三度、イエス様は祈りました。しかし、言葉を重ねるのです。「私の思いではなく、あなたの御心がこの身に成りますように」と。

十字架の苦しみから逃れたいとの願い、それは当然のことです。一体誰が、自ら進んで苦しみを、しかも耐えることの出来ない十字架の苦しみを望むでしょうか。しかし、イエス様の祈りは、自分の願いの言葉だけでは終わりませんでした。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯を私から取りのけてください。しかし、わたしが願うことなく、御心に適うことが行われますように」と。

ローマ帝国の属州であったユダヤ地方に派遣されていた総督ピラトの前に引き出されたイエス様が、ピラトの尋問の後に死刑を宣告され、祭司長や律法学者に引き渡されたのは、金曜日の明け方でした。そして、刑場であるゴルゴタの丘へと向かうのです。重い木の十字

架を背負ってです。

朝 9 時、十字架に架けられたイエス様は、午後 3 時までの 6 時間、苦しみ続け、息絶えました。そして、弟子の一人であったアリマタヤのヨセフが、その遺体を引き取り、墓に葬ります。使徒信条にある「死にて葬られ、陰府に降」られたのです。

それから 3 日目、甦りの朝を迎えました。

今日、この日です。

私は、甦りの朝のこの時、私たちが毎主日唱和している使徒信条の一節、「死にて葬られ、3 日目に死人のうちより甦り」の言葉の意味について改めて考えたいと思います。

まず、「死にて葬られ」です。

イエス様が味わわれた“死”の意味です。

この“死”は、十字架の苦しみに続くものです。

それでは、イエス様が負われた十字架とは何か、十字架にどのような意味があるかです。

主イエス・キリストの負われた十字架。それは、神様と私たちとの断ち切られた関係を修復し、和解の役割を担う物でした。神様は、ご自分の最も愛する独り子であるイエス様を十字架に架け、苦しみと死を味わわせることによって、和解の手を差し伸べられました。主イエス・キリストの十字架の苦しみとその死は、私たち人間に内在する神様への背きの、赦されざる“罪”を、私たちに代わってイエス様に負わせたものであり、贖いの十字架を信じることによって、私たちは罪を赦され、神様の和解の業に招き入れられるのです。さらに、死からの復活は、人間にとって誰もが逃れることの出来ない死も、神様の支配の下にあること、そして、甦りによって、神様が直接支配する神の国へと導き入れられることを明らかにしたのです。

この時、私は再び、「陰府に降り」の意味を考えます。

イエス様が、“死”へと引き渡されたその意味です。

より正確に言えば、私たちがイエス様に負わせた十字架とは何か、私たちがイエス様を“死”へと追いやったその罪とは何かです。

私は、それこそが、私たち誰もの心にある高慢さだと思います。

高慢、傲慢とも言います。

私たちは、神様の御心を尋ね求めて生きて行こうとしています。

しかし、神様に従い、御心を尋ね求めて生きて行きたいと願いながら、現実には自分に負け、自分の思いを先立たせてしまうのです。

常に他と自分を比較し、少しでも他より自分が優れたところを見つけ出し、そこに安住したいと思うのです。自分の置かれている境遇を見て、それに囚われ、他との違いに一喜一憂する私たちです。そうすることの虚しさを知りつつも、その世界から逃れることの出来ない

自分を知っています。

他を羨み、嫉妬し、時には他を軽蔑し、その失敗を喜ぶ。そのような自分です。

そのような自分を思う時、あの使徒信条の一節が私たちの心に響くのです。

「死にて葬られ、陰府に降り」の一節です。

しかし、神様は、イエス様を陰府に捨てて置かれませんでした。3日目に死を打ち破り、死人の中から引き上げられ、甦えられたのです。私たちの一切の弱さ、醜（みにく）さを一身に背負われ、陰府に降られた後、神様はイエス様を死より引き上げられました。私たちの弱さや醜さを覆い包み、それを赦すためです。

甦りの朝、イエス様が葬られたあの空虚な墓の中でイエス様と出会い、「私は、主を見ました」とのマリアの言葉は、私たちの弱さ、醜さを覆い包み、それら全てを赦すと言う神様の宣言でした。

今日この日、私たちは、今再び、神様からの和解が成就したことを意味する主イエス・キリストの甦りを、「私は、主を見ました」と言うマリアの言葉をもって心に刻み付けたいと思うのです。

そして、今日この日。私たちも又、「私は、主を見ました」と証しする者となって、人生の馳せ場を走り抜こうではありませんか。

祈りましょう。